

情報化社会の皮膚科診療

私が皮膚科医になって、早くも30年以上が過ぎた。この間の診療を思い起こしてみると、その風景が時代とともに変遷するのは当然ながら、とくに最近ではかなりの変化を実感する。

まず、患者さんの権利意識が明らかに高くなった。医師と患者さんの関係が上下関係ではないのは当然であるが、理不尽なことを求められて対応に苦慮することもある。こうした傾向が後戻りすることはないと思われる。

次に、スマートフォンやインターネットが普及した影響が少なくない。まず、患者さんが皮疹をスマートフォンに撮影していて、診察時に医師に見せることが日常茶飯事になった。蕁麻疹など診察時に皮疹を認めない場合も、写真を見れば即時に判断ができるため、これは好ましい進歩ともいえる。皮疹の変化や治療の過程を経時的に記録しているときも、診療のうえで参考になる。

一方、インターネットについては正と負の両面がある。患者さんが自分の病気について、インターネットで詳細に調べて診療に臨むことが増えている。患者さん同士で医師情報をSNSなどを通じて共有していることもある。勉強しているのはよいことであるものの、たとえ皮膚科の専門医であっても、専門外特定の疾患について調べ尽くした素人に叶わない場面もあり、診療がやりにくくなったと感じる先生は少なくないことと思う。さらに問題なのは、そうして事前に仕入れた情報が必ずしも正しくない場合である。皮膚科が目に見える部位を扱う以上、皮疹の「絵合わせ」が可能であり、その絵合わせによる自己診断が正しければよいが、明らかに違う疾患であるのにそうと信じて受診した患者さんには、その誤解を解くための手間が余計にかかる。病態や治療に関するインターネットの情報が偏っているか、エビデンスを欠くか、あるいは誤っていることもある。こちらの説明をすんなり受け入れてもらえず、その結果、患者さんとの意思の疎通がうまくいかなければ、患者さんがドクターショッピングすることにつながる。

皮膚病は、治療の過程も含めて患者さんが直接見ることができるため、一昔前より情報量が格段に増えた現代では、その診療に多くの緊張を伴うようになった。そうした中で、将来、AIの普及によって画像処理とパターン認識がさらに進歩すれば、遠隔地治療などで恩恵を受ける人がいる一方で、皮膚科医そのものが不要になる懸念すらある。しかしながら、皮膚科の診療には五感を働かせる必要がある。そして、単なる情報のやり取りではなく、患者さんと対面でしっかりと話をして心を通わせつつ、患者さんとその内面からも治療していく、昔ながらの診療の重要性は変わらないだろうと私は信じている。

朝比奈昭彦

(東京慈恵会医科大学皮膚科学講座教授)